

述語論理と SSReflect のタクティク

1 述語論理

前回見た命題論理は、推論の概念を捉えているが、具体的な対象に対して議論することができない。我々が一般的に使う論理はその拡張である述語論理になる。最も見慣れているのは一階述語論理だが、実数の形式化などには二階述語論理が必要。

論理式 二階述語論理の論理式は以下の結合子から定義される。(X を除くと一階述語論理に限定される)

$t ::= x$	項変数	$P, Q ::= \dots$	命題
c	項定数	ϕ	命題述語
$f(t_1, \dots, t_n)$	項関数	$\phi(t_1, \dots, t_n)$	述語
$\phi ::= p$	述語名	$\forall v.P$	全称
X	述語変数	$\exists v.P$	存在
$v ::= x \mid X$	変数	$t_1 = t_2$	等価性
$\sigma ::= t \mid \phi$	代入		

導出規則 命題論理の導出規則に以下の規則を加える。

\forall 導入	$\frac{\Delta \vdash P \quad v \notin fv(\Delta)}{\Delta \vdash \forall v.P}$	\exists 導入	$\frac{\Delta \vdash [t/x]P \quad \Delta \vdash [\phi/X]P}{\Delta \vdash \exists x.P \quad \Delta \vdash \exists X.P}$
\forall 除去	$\frac{\Delta \vdash \forall x.P \quad \Delta \vdash \forall X.P}{\Delta \vdash [t/x]P \quad \Delta \vdash [\phi/X]P}$	\exists 除去	$\frac{\Delta \vdash \exists v.P \quad \Delta, P \vdash Q \quad v \notin fv(\Delta, Q)}{\Delta \vdash Q}$
反射率	$\Delta \vdash t = t$	代入	$\frac{\Delta \vdash [t_1/x]P \quad \Delta \vdash t_1 = t_2}{\Delta \vdash [t_2/x]P}$

ここで自由変数 $fv(P)$ と代入が利用される。

$$\begin{aligned}
 fv(x) &= \{x\} & fv(c) &= \emptyset & fv(f(t_1, \dots, t_n)) &= \bigcup fv(t_i) \\
 fv(True) &= fv(False) = fv(p) = \emptyset & & & fv(\phi(t_1, \dots, t_n)) &= fv(\phi) \cup \bigcup fv(t_i) \\
 fv(P \supset Q) &= fv(P \wedge Q) = fv(P \vee Q) = fv(P) \cup fv(Q) & & & fv(X) &= \{X\} \\
 fv(\forall x.P) &= fv(\exists x.P) = fv(P) \setminus \{x\} & & & &
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 [t/x]x &= t & [t/x]y &= y & [\phi/X]t &= t \\
 [t/x]c &= c & [t/x]f(t_1, \dots, t_n) &= f([t/x]t_1, \dots, [t/x]t_n) & &
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 [\sigma/v]True &= True & [\sigma/v]False &= False & [\phi/X]X &= X & [\sigma/v]X &= X \\
 [\sigma/v](P \supset Q) &= [\sigma/v]P \supset [\sigma/v]Q & & & & & \wedge, \vee \text{も同様} & \\
 [\sigma/v](\phi(t_1, \dots, t_n)) &= [\sigma/v]\phi([\sigma/v]t_1, \dots, [\sigma/v]t_n) & & & & & & \\
 [\sigma/v]\forall w.P &= \forall w.[\sigma/v]P \quad (w \notin fv(\sigma) \cup \{v\}) & & & [\sigma/v]\forall v.P &= \forall v.P & & \\
 [\sigma/v]\exists w.P &= \exists w.[\sigma/v]P \quad (w \notin fv(\sigma) \cup \{v\}) & & & [\sigma/v]\exists v.P &= \exists v.P & &
 \end{aligned}$$

導出の例

$$\frac{\frac{\forall x. human(x) \supset mortal(x) \vdash \forall x. human(x) \supset mortal(x)}{\forall x. human(x) \supset mortal(x) \vdash human(S) \supset mortal(S)} \quad human(S) \vdash human(S)}{\forall x. human(x) \supset mortal(x), human(S) \vdash mortal(S)}$$

2 Coq との対応

Coq では項と述語が型をもっており、代入が型を保たなければならない。さらに、型自身が型 (ソート) をもっている。

$\vdash t, x : T$ かつ $\vdash T : Set$ または $\vdash T : Type$

$\vdash P : Prop$

$\vdash p, X : T_1 \rightarrow \dots \rightarrow T_n \rightarrow Prop$

さらに、全ての $T \rightarrow P$ が $\forall x : T, P$ の略記法であり、 \forall と \rightarrow に関する規則が統一されている。

$$\text{抽象} \quad \frac{\Delta, v : S \vdash t : T}{\Delta \vdash (\text{fun } v : S \Rightarrow t) : \forall v : S, T} \qquad \text{適用} \quad \frac{\Delta \vdash t : \forall v : S, T \quad \Delta \vdash u : S}{\Delta \vdash (t u) : [u/v]T}$$

$\Delta \vdash t : T$ が項 t が仮定 Δ の元で型 T をもつという意味である。 T が命題なら ($\vdash T : Prop$), t はその証明項。今までの導出規則が拡張され、 \vdash と結論の間に証明項が含まれる。ただし、抽象が \rightarrow の導入と \forall の導入を兼ね、適用が \rightarrow の除去と \forall の除去と述語および項関数の構成を兼ねる。たとえば、公理の規則は $\Delta \vdash x : T \ (x : T \in \Delta)$ になる。

上の導出の例は適用 2 回でできる。

```
Section Socrates.
Variable A : Set.
Variables human mortal : A -> Prop.
Variable socrates : A.

Hypothesis hm : forall x, human x -> mortal x.
Hypothesis hs : human socrates.

Theorem ms : mortal socrates.
Proof.
  apply: (hm socrates).
  assumption.
Qed.

Print ms.
ms = hm socrates hs
      : mortal socrates
End Socrates.

(* 定義を表示する *)
(* ((hm socrates) hs) *)
```

3 全称と存在

\forall と \exists の間に De Morgan の法則がなりたつ。前回と同様に、 \exists を導出しようとしたときに `classic` を使わなければならない。

```

Section Laws.
Variables (A:Set) (P Q : A->Prop).

Lemma DeMorgan2 : (~ exists x, P x) -> forall x, ~ P x.
Proof.
  move=> N x Px. elim: N. by exists x.
Qed.

Theorem exists_or :
  (exists x, P x \\/ Q x) -> (exists x, P x) \\/ (exists x, Q x).
Proof.
  move=> [x [Px | Qx]]; [left|right]; by exists x.
Qed.

Hypothesis classic : forall P, ~ ~ P -> P.

Lemma DeMorgan2' : (~ forall x, P x) -> exists x, ~ P x.
Proof.
  move=> nap.
  apply: classic => nenp.
  apply: nap => a.
  apply: classic => npa.
  apply: nenp.
  by exists a.
Qed.

End Laws.

```

練習問題 3.1 以下の定理を *Coq* で証明せよ.

```

Section Coq3.
Variable A : Set.
Variable R : A -> A -> Prop.
Variables P Q : A -> Prop.

Theorem exists_postpone :
  (exists x, forall y, R x y) -> (forall y, exists x, R x y).
Theorem or_exists : (exists x, P x) \\/ (exists x, Q x) -> exists x, P x \\/ Q x.

Hypothesis classic : forall P, ~ ~ P -> P.
Theorem remove_c : forall a,
  (forall x y, Q x -> Q y) ->
  (forall c, ((exists x, P x) -> P c) -> Q c) -> Q a.
End Coq3.

```

4 System F

Coq の *Prop* 型は Girard が考案した System F という型体系を実装しており、 \forall と適用のみで二階述語論理を表現できる。

```

Section SystemF.
Definition Fand P Q := forall X : Prop, (P -> Q -> X) -> X.
Definition For P Q := forall X : Prop, (P -> X) -> (Q -> X) -> X.
Definition Ffalse := forall X : Prop, X.
Definition Ftrue := forall X : Prop, (X -> X).
Definition Feq T (x y : T) := forall P, P x <-> P y.
Definition Fex T (P : T -> Prop) := forall X : Prop, (forall x, P x -> X) -> X.

```

```

Theorem Fand_ok (P Q : Prop) : Fand P Q <-> P /\ Q.
Proof.
  split => [pq | [p q] X].
  + split; by apply: pq.
  + by apply.
Qed.

Theorem For_ok (P Q : Prop) : For P Q <-> P \/ Q. Abort.
Theorem Ffalse_ok : Ffalse <-> False. Abort.
Theorem Ftrue_ok : Ftrue <-> True. Abort.
Theorem Feq_ok T (x y : T) : Feq x y <-> x = y. Abort.
Theorem Fex_ok T (P : T -> Prop) : Fex P <-> exists x, P x. Abort.
End SystemF.

```

各論理演算子の System F での表現がその除去規則を模倣している。

特に等価性に関する定義 Feq は Leibniz equality と言い、古くから知られている。 x と y が等しいとは、任意の述語 p について、 $p(x)$ と $p(y)$ が同値であること、言い換えれば、 x と y を区別する述語が存在しないこと。

練習問題 4.1 *System F* での符号化に関する定理を証明せよ。

5 タクティク・タクティカル・修飾子

前回はタクティクと論理規則との関係について述べたが、SSREFLECT のタクティクが多くの機能を秘めており、ここでその一部を説明する。

基本タクティク

move, apply, done, case, split, left, right, elim, have, suff, rewrite, set でほぼ証明ができるが、特に move と rewrite が修飾子を多く使う。

Coq の証明状態を以下とする。(ただし焦点がない場合もある)

```

假定 Δ
=====
焦点 P -> 結論 Q

```

各タクティクがゴールの各部 ($\Delta; P \vdash Q$) を論理的規則に基づいて変えていく。その変化を説明する。

move 修飾子なしでは何もしないが、修飾子によって假定と前提の移動や左規則の適用が可能。

apply ゴールを適用した定理の前提に変える。規則 Apply-R を参照。

前の状態: $\Delta; P_1 \rightarrow \dots \rightarrow P_n \vdash Q$

後の状態: $\Delta; \vdash P_i$ ($1 \leq i \leq n$) に置き換わる

done 様々な自明な解決法を試み、解決できなければエラーを起こす。公理、矛盾、反射率を含む。

case 焦点に対して場合分けを行う。単独では move=> [] とほぼ同じ。規則 \wedge -L と \vee -L を参照。

split \wedge -R を参照。ゴールを二つに分割する。

left, right \vee -R を参照。ゴールの左か右を選ぶ。間違えると証明ができない可能性が大きい。

elim 焦点の返り値 (結論) に対して場合分けを行う。型によって帰納法の原理が適用される。併せて、apply と同様に焦点の前提もゴールのリストに加えられる。焦点が否定ならば

前の状態: $\Delta; \neg P \vdash Q$

後の状態: $\Delta; \vdash P$

have $H : P$

新しい仮定 $H : P$ を証明した上で現在のゴールの証明を続ける.

前の状態: $\Delta; \vdash Q$

後の状態: $\Delta; \vdash P$ と $\Delta, H : P; \vdash Q$

仮定名 H が省略されると代わりに $\Delta; P \vdash Q$ になる.

suff $H : P$

have と同じだが, ゴールの順番が逆になる. 新しい仮定の中で現在のゴールを証明した後
にその仮定を証明しなければならない. have $H : P$; last first とほぼ同じ.

rewrite /def

ゴールの焦点および結論の中で定義 def を展開する. 詳しい rewrite の修飾子は後で述
べる.

rewrite lemma

補題 $lemma$ の結論が等式 $t_1 = t_2$ ならば, ゴールの焦点および結論の中で t_1 を t_2 に書き換
える. 等式の変数が自動的に選ばれる. $lemma$ の前提がゴールリストに追加される.

set $x := t$

仮定に定義 $x := t : T$ を加える. x は仮定名, t は項, T は t の型. 同時に結論の中に t を x に
置き換える (rewrite $-/x$ と同じ).

t の中に穴「 $_$ 」を含めてもいい. その場合, 結論の中に当て嵌る項を探し, その穴を自動的
に埋める.

have $H := t$

H は仮定名, t は項. Δ の元で t の型が T なら, 仮定 $H : T$ を置く. t が証明項なら, T が
命題になる.

基本タクティカル タクティクの前後に書き, そのタクティクの動作を拡張する.

: move, apply, case, elim の直後に使える. タクティク本体を実行する前に前提を置く.

前の状態: $\Delta; \vdash Q$

タクティカル: $H_1 \dots H_n$

後の状態: $\Delta'; P_1 \vdash P_2 \rightarrow \dots \rightarrow P_n \rightarrow Q$

$H_i : P_i$ が Δ に含まれる仮定なら, Δ' から除かれる. そうでなければ, H_i は Δ の元で片付
け可能な項で, P_i はその型である. なお $H_i : P_i$ が Δ に含まれても, (H_i) と書くことで置
いたままにできる. また, 不要になった仮定 K があれば, $\{K\}$ と書くことで消すことがで
きる.

=> 全てのタクティクの後に使える. 後に書かれた名前が順番に前提を焦点から仮定に変える.

[] は焦点に左規則や分解規則を適用する. 中に名前や修飾子を書いてもいい. $[l_1 \mid \dots \mid l_n]$
の形で分解後の各場合に対する列も書ける.

- move 以外のタクティクと組合せたとき, =>の後の最初の [] か $[l_1 \mid \dots \mid l_n]$ が生成
された各ゴールに対するものになり, 分解を行わない. その前に-を書くことで分解になる.

/= は焦点と結論を単純化する.

// は全てのゴールに対して done で解決を失敗せずに試みる.

//= はその両方を行う.

/H は項 H を焦点に適用する.

/(H) は焦点を H 適用する.

-> 焦点が等式 $t_1 = t_2$ ならば t_1 を t_2 に書き換え, その後に焦点が消される.

<- は逆向きに書き換える.

{K} は「:」のときと同じ意味.

/H apply の直後に使うと H が結論に適用される. move や case の直後だと, タクティクを実行する前に H が焦点に適用される.

in $H_1 \dots H_n$ ほぼ: $H_1 \dots H_n \Rightarrow H_1 \dots H_n$ と同じ意味だが, 操作が元の結論に適用されない.

tac₁; tac₂ tac₁ を実行した後に, 生成された全てのゴールに対して tac₂ を実行する.

tac; [tac₁ | ... | tac_n]

tac が n 個のゴールを生成した場合, それぞれに対して tac₁, ..., tac_n を実行する.

by tactic

tactic; done と同じ. なお, tactic が「;」を含んでもいい. (次の「.」まで行く)

by [] done と同じ.

do n tactic tactic を n 回繰り返す.

do !tactic tactic を可能な限り繰り返す.

rewrite

rewrite は独自の構文を使う. 基本的には, 定理の名前や適用を並べる.

```
rewrite lem1 lem2 (lem3 n 1)
```

各定理に対して, 繰り返しや適用箇所の指定もできる.

!lem 定理 lem による書き換えを可能な限り繰り返す.

n!lem 定理 lem による書き換えを n 回繰り返す.

?lem 定理 lem を 0 または一回使う.

-lem 定理 lem を左向きに使う.

{n}lem n 番目の出現を書き換える

[p]lem パターン p(穴のある項) にマッチする最初の出現を書き換える.

/def 定義 def を展開する.

-/def 定義 def を畳み込む.

(lem₁, ..., lem_n)

lem₁...lem_n を順番に試して, 最初に成功してものを使う. 他の修飾子(特に「!」)と組合せてもいい.

(_ : t₁ = t₂)

t₁ を t₂ に置き換える. t₁ = t₂ がゴールリストに追加される.

上記の書き換え修飾子を組合せることができるが, 順番に気を付けなければならない.

```
rewrite -{2}[_ + n]lem
```

また, 定理や定義の間に評価修飾子 (/=, //, //) を挿入してもいい.